様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：３２６６５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６４２０６２１

研究課題名（和文）東北地方に現存する野外舞台建築・芝居小屋の活用実態と地域における役割に関する研究

研究課題名（英文）A Study on Actual Situation and Regional Function of Existent Outdoor Theater Architecture and Shibai Goya in Tohoku District

研究代表者
浦部　智義（URABE, Tomoyoshi）

日本大学・工学部・准教授

研究者番号：１０４０９０３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、東北６県に現存し歴史を持つ劇場建築のうち、その多くが野外で行なわれる地歌舞伎を行う舞台建築と舞台・客席が一体化している芝居小屋を対象の中心としている。
前者は、地歌舞伎を行う舞台建築が密集して多く分布していた南会津地方を含み、かつ現在も特徴的な地歌舞伎が存続している福島県内、後者は、東北6県全体について、代表的な事例を中心にその変遷や運営の実態を明らかにした。また、芝居小屋に関しては、典型的な事例を対象に、地域住民への意識調査を行い地域における役割を明らかにした。さらに、地歌舞伎を行う舞台建築と芝居小屋の幾つかの公演時の観客への意識調査を通しても、それらの役割を分析した。

研究成果の概要（英文）：This research focuses on two types of existent historical theater architecture in Tohoku 6 Prefectures: stage architecture for local kabuki and shibai goya, local playhouses, that stage and seats are integrated. The research revealed transition and the actual situation of management. Theater architecture serving as characteristic local kabuki in Fukushima Prefecture, including Minamiaizu Region where local kabuki is densely distributed, are selected as research target. Shibai goya were selected as research target from typical samples in Tohoku 6 prefectures. Also, the research revealed regional function of shibai goya by attitude survey of typical examples from local residents. Furthermore, the research analyzed the function of theater architecture and shibai goya by attitude survey from spectators of local kabuki performance.

研究分野：建築計画・施設計画

キーワード：東北地方　福島県　地歌舞伎　芝居小屋　舞台建築　地域における役割　地域資源　運営

１．研究開始当初の背景

(1)　野外舞台建築・芝居小屋に関する研究は、取分けその成立した年代において庶民の生活に深く根ざし、かつ独自の発展過程を有する文化施設として専ら歴史的視点での研究が盛んに行われ、大著も多数存在する[文①②]。

　また、高度経済成長時代から現在に至るまでの間には、失われつつある多くの野外舞台建築・芝居小屋の価値を見直す基礎資料として、舞台・見所とその配置を実測して物理的側面から分析したものも数多く報告されている[文③④]。しかし、現代における野外舞台建築・芝居小屋に関する報告は少なく、そこでの活動の実態や運営・に着目し、その地域における役割という観点から、野外舞台建築・芝居小屋を分析した報告は見受けられない。

　単に東北地方における野外舞台建築の分布の把握という視点からしても、1967～68年の大規模な現地調査[文⑤]以降にまとまった報告はなく、またこの調査が全てを網羅しているとはいい難い。さらに、その価値が見直される気運が高まって、当時中断していた芸能が復活し、分布の様子が変わっていることも予想された。

２．研究の目的

(1)　本研究は、東北６県に現存し歴史を持つ劇場建築のうち、その多くが野外で行なわれる地歌舞伎を行う舞台建築と舞台・客席が一体化している芝居小屋を対象の中心としている。前者は、地歌舞伎を行う舞台建築が密集して多く分布していた南会津地方を含み、かつ現在も特徴的な地歌舞伎が存続している福島県内、後者は、東北６県全体について、代表的な事例を中心にその変遷や運営の実態を明らかにすることを目的とする。また、芝居小屋に関しては、典型的な事例を対象に、地域住民への意識調査を行い地域における役割を明らかにする。さらに、地歌舞伎を行う舞台建築と芝居小屋の幾つかの公演時の観客への意識調査を通しても、それらの役割を分析することを目的とする。

３．研究の方法

(1)　地歌舞伎を対象とした研究では、明治期以前に起源を持つ地歌舞伎が行われる舞台を持った建築（以下、地歌舞伎・舞台建築と略）が密集して多く分布していた南会津地方を含み、かつ現在も存続している地歌舞伎が確認されている福島県を対象として、まず、①福島県内に現存している地歌舞伎について、各町村・民俗史を扱った関連書籍の内容等と現地住民への証言とを照らし合わせながら、地歌舞伎上演が衰退・中断・復活し現在に至る変遷を探る。また、②その地歌舞伎が行われている舞台建築の概要を把握する。その上で、③地歌舞伎・舞台建築における現在の上演を中心とした諸活動を含む運営面について分析する。

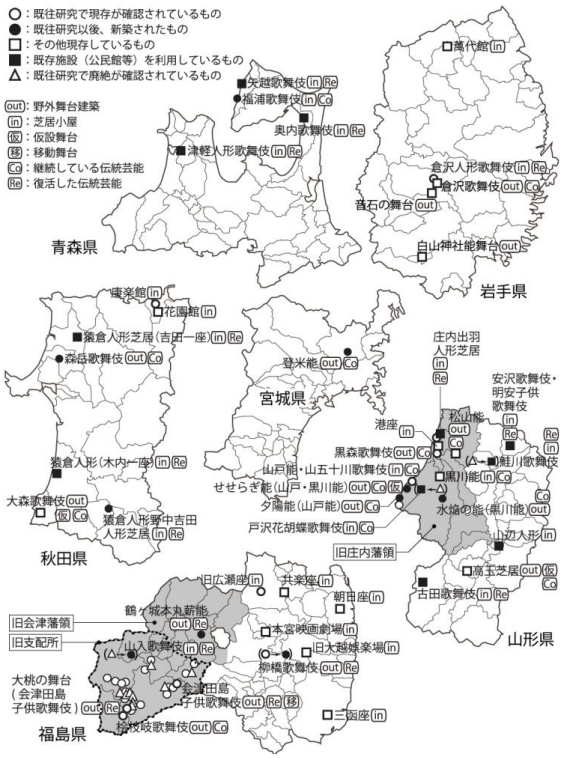

図１東北に現存する伝統舞台芸能と舞台建築分布

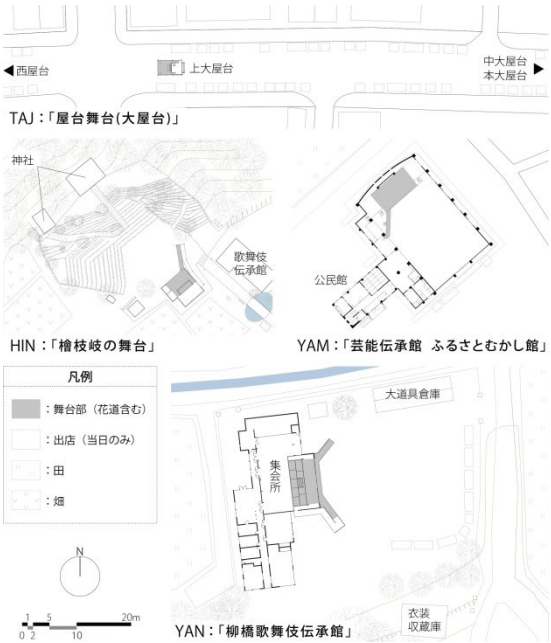

図２福島県内に現存する地歌舞伎・舞台建築の配置図兼平面図

(2)　芝居小屋を対象とした研究では、まず、①秋田県の康楽館など幾つか現存が確認されているが、その実態が明らかになっていない東北地方を対象に、芝居小屋が数多く建設されていた当時と比較して現存する芝居小屋の分布状況を把握する。また、②現存する芝居小屋を対象として、所有者や管理・運営者へのヒアリング調査も交えて、建設当時から現在までの所有関係や用途、また公共的な活用の変遷等の実態を明らかにする。その上で、③現在も公共的に活用されている芝居小屋を対象として、周辺の地域住民の芝居小屋

に関する利用や意識についてアンケート調査を行い、現存する芝居小屋の地域における役割を明らかにする。

(3)　公演時における調査研究では、まず、①東北地方に現存する幾つかの芝居小屋の中から、代表的な事例の一つである康楽館を対象として、その公演の実態と観客の芝居小屋に対する意識を明らかにする。また、②専用舞台を持たないが代表的な地歌舞伎をとりあげて調査分析し、その公演の実態と観客の地歌舞伎に対する意識を明らかにする。即ち、ともに管理・運営者への現状等のヒアリング調査からはじまり、公演時の観察・記録調査、さらに公演時における観客への意識調査を通して、その実態を明らかにする。

４．研究成果

(1)　福島県内に現存している地歌舞伎について、主に以下のことを明らかにした。

①第二次大戦後に一度中断した地舞伎復活し現在運営を行っている場合、復活直前には、以前に地歌舞伎の運営に関わっていた経験者（地域・集落の高齢者）が振付などの指導役となっていた例がある。また、地域・集落内やその周辺に振付などの指導役がいない場合には、経験者（地域・集落の高齢者）が中心となりつつも、外部から専門家の振付師を招くことで復活し、現在に至っている。なお、経験者から指導を得られる限界からか、第二次大戦後は、いずれの場合も運営の中断期間は 40 年以内である。

②老朽化等によって歌舞伎上演に使われなくなった仮設舞台は廃棄され、復活直後には発祥当時の宗教的祭事とは切り離され、身近にある地域の集会所や体育館などの公共施設で上演していた例もある。それらは、復活後しばらくして自治体の助成金を用いて、運営上の負担軽減（舞台建築の常設化）や演出性向上を目的として、上記の既存公共施設に舞台の専門性を付加して上演する運営を行っている。

③PR の範囲を見てみると、同町村内の他、県内外を対象としている例と、同町内のみを対象としている例、及び同市内とその周辺市町村を対象としている例の 3 つのパターンがある。これらの範囲設定は上演回数や他所での出張上演など運営の方針にも影響している。

④後継者育成を主目的として、地域・集落にある小中学校と連携している運営団体には、今のところ若い演者も多数所属しており、同地域・集落内で多世代が継続して運営できる可能性がある。

⑤有形・無形文化財として認められることが、活動の復活や運営を継続することへの住民の動機付けの１つとなっている。特に、助成金への依存割合が高い運営団体では、その様な自治体の理解と協力も必要である。復活直後には、公民館の事業として、自治体が外部から講師を招き、地域の人々向けに専門性が

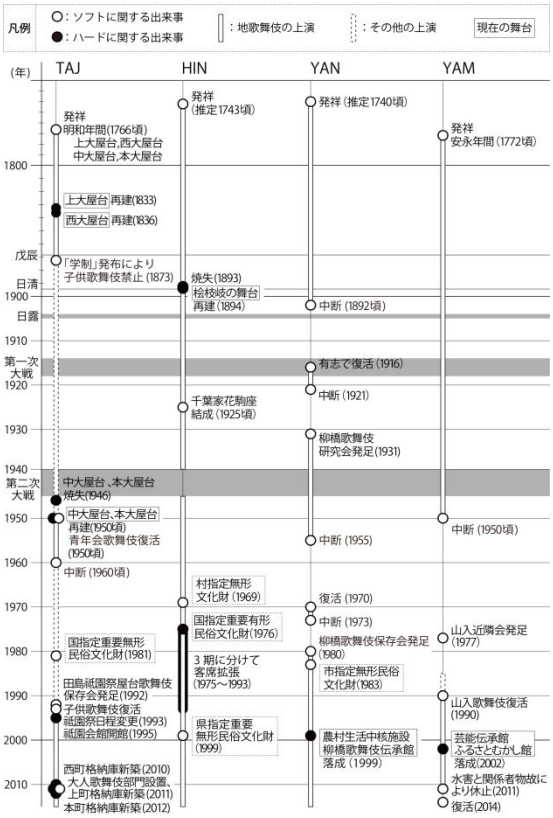

図 3 福島県内に現存する地歌舞伎の上演の衰退・中断・復活の変遷

高い化粧・着付けの講習会を行うなどの取り組みも見られた。

⑥演技者数は、地域・集落の住民約 15～20 名程度であるが、上演に際して直接的に運営に係わる人数は 80～100 名以上の例や、また運営・保存の組織としては全戸参加の例も見られる。即ち、地域・集落内で、裏方も含めて運営に係わる地域・集落住民数は少なくなく、また、その係わり方も多様である。

(2)　東北地方の芝居小屋の分布や現存する芝居小屋の実態、並びに周辺の地域住民の芝居小屋への意識調査・分析を通した地域における役割について、主に以下のことを明らかにした。

①かつて東北地方では、主として地方都市の主要街道沿いと鉄道沿線、及び経済的に豊かであった農山漁村にも分布していたが、都市部の開発と農山漁村の衰退によって、現存するのは1割程度である。

②若木座、藤田劇場のように構造体のみが再利用されて、所有者の所在や用途も不明確で発見し難い状況となっているものもあった。

③東北地方の芝居小屋も、映画の普及に伴いその上演が主な用途となった後に衰退するなど大都市部と同じ傾向が見られたが、比較的時間をかけて変化・衰退するといった地域的な特徴も見られた。また、現存する芝居小屋は概ね、地域等の要望に応じて所有者や用途の変更や改修が行われ、現在では地域における役割が見直されて公共的に活用されている芝居小屋も存在する。

④改修後の現在形としては、舞台が大きく花道・回り舞台や吊り物機構がある劇場型、舞台と客席がフラットで舞台機構・設備もない多目的型、舞台が小さく主に映画館として活用している型と分類でき、運営・施設利用とも関係している。
⑤現存する芝居小屋の運営主体としては、自治体と民間の合同企業、市民団体、自治体、個人に分類できる。また内容は、自主事業に加え貸館事業も行うと貸館事業は行わない、貸館事業のみ行うに分類できる。
⑥アンケート調査の結果、どの芝居小屋も認知度は90%前後あり、周辺の地域住民に知られているが、施設のイベントへの参加の割合が90%程度から50%を下回る施設まで幅があり、個人運営の施設では、比較的少ない傾向にある。
⑦イベント以外の施設利用の割合も、施設毎に50%程度から10%程度まで幅があり、これは、自治体が係わって貸館事業を行っている施設では、個人・任意団体の発表・活動の場としても利用されており、地域の文化・創造的な活動の一役を担っている。
⑧周辺の地域住民の25～35%程度が芝居小屋のより良い活用を望んでいるのみならず、運営を自治体と民間で協働し自主事業を行っている施設では、運営に関わりたい意欲も18%と比較的高く、既に運営に関わっている住民も多い。また、運営の開かれ具合は、一度も地域の芝居小屋を訪れたことの無い様な、直接関係を持たない周辺住民への施設の受け入れられ方にも影響する。
⑨芝居小屋への親近感は、イベントへの参加やイベント以外の活動での利用頻度とある程度関係があり、それらが少ないと親近感も感じていない。また、他にはない特別感は、来館・利用頻度の他に建物や空間の印象にもよるためか、30%を上回る施設もあり存在感を示していた。

東北地方に現存する芝居小屋の実態とその周辺の地域住民の芝居小屋に対する意識が浮き彫りになったが、まず、一部の芝居小屋は、県外など他地域からも参加者が来るイベントや見学等に利用される文化的価値が高い建築として機能していると云えよう。それに加えて、本研究で対象とした東北地方では、広大な土地に集落が点在し、文化・創造活動ができる施設が整備されている市街地から遠い地域に現存している芝居小屋もあり、それらは、立地する自治体の管理・運営面の支援などを受けることで、その地域の芸能や諸行事の練習など、様々な文化・創造活動を支える施設となる可能性があることが明らかとなった。また、その活動等によって施設の来館・利用頻度が高い周辺住民は、芝居小屋に対する親近感のみならず運営への参加意思も高まる傾向にあることから、身近にある芝居小屋が地域の文化・創造活動の拠点として活用されることで、それらが存続する可能性を高めることにもつながると考えられる。

表 1 東北地方に現存が確認されている芝居小屋とその確認資料

No.	名称	所在地	現在の所有者	確認資料 A	B	C	D	E	F	G
1	康楽館	秋田県鹿角郡小坂町	自治体	○	○	○				
2	若狭座	秋田県山本郡三種町	個人						○	
3	萬代館	岩手県二戸郡一戸町	自治体	○		○		○		
4	若木座	山形県鶴岡市	個人							○
5	大山座	山形県鶴岡市大山	個人						○	
6	旧広瀬座	福島県福島市	自治体	○	○					
7	藤田劇場	福島県伊達郡国見町	個人			○				
8	共楽座	福島県福島市飯野町	個人						○	○
9	朝日座	福島県南相馬市	個人	○	○	○	○	○		
10	本宮映画劇場	福島県本宮市	個人	○		○		○		
11	仁王座	福島県大沼郡会津美里町	個人			○				
12	旧大越娯楽場	福島県田村市大越町	自治体	○	○	○				
13	浅川座	福島県石川郡浅川町	個人					○		
14	海盛座	福島県いわき市	個人					○		

凡例
A：日本建築学会　歴史的建築総目録データベース
B：文化庁文化遺産データベース
C：自治体へのアンケート調査
D：キネマ旬報社全国映画館録　昭和 11 年度 (1936)
E：キネマ旬報社全日本映画館録　1958 年度版
F：他の芝居小屋へのヒアリング調査の過程
G：関連する文献・インターネット

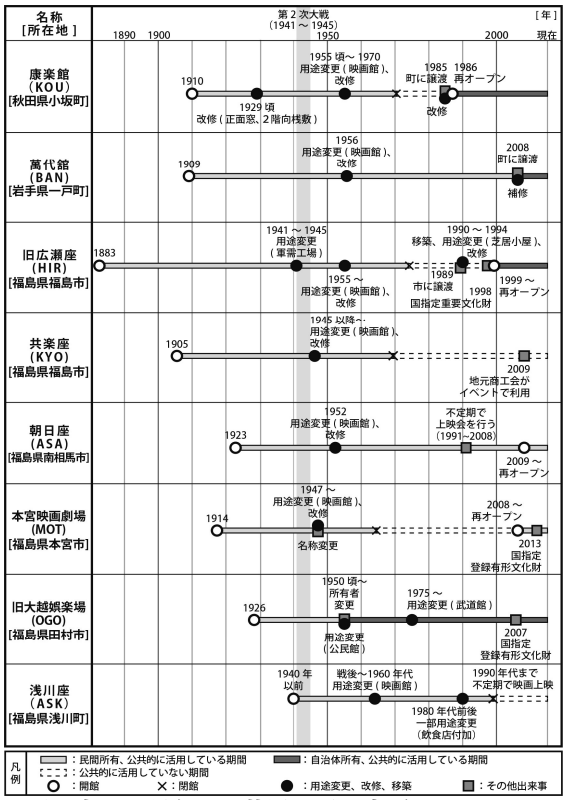

図 4 東北に現存する芝居小屋の変遷

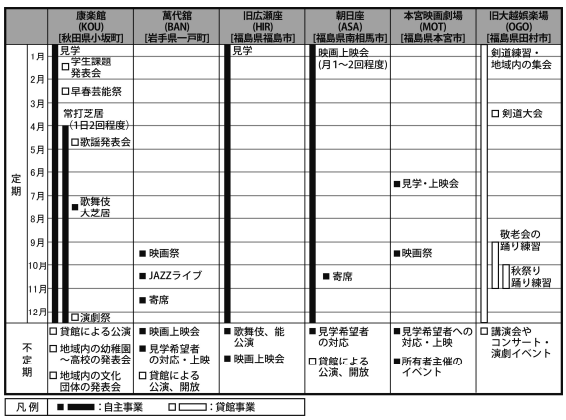

図 5 東北で公共的に活用されている芝居小屋の年間スケジュール

(3)　代表的な芝居小屋の一つである康楽館

の公演時の調査分析を通して、主に以下のことを明らかにした。まず、①康楽館は、地域内はもとより地域外の来館者にとっても、ある割合で代替可能でない特別な場所となっている。また、②公演時に来館している地域内の人にとっては、康楽館は歴史的価値や観光資源としてのみならず、人と交流できる場所で日常の一部として認識している。

また、専門舞台を持たないが代表的な地歌舞伎の調査から、共にある程度、地域の地歌舞伎は特別なものであり消滅時に寂しさを感じる観客が確認でき、そのうちどちらも半数以上が地域の居住者であることが明らかとなった。また、地域の地歌舞伎に特別感を抱かないにもかかわらず、消滅時に寂しさや困窮感を覚える観客もどちらでも確認できたことから、観客の一部ではもはやそれら地歌舞伎が日常の一部に溶け込んでいるのではないと考えられる。

＜参考文献＞

① 後藤慶二　日本劇場史　岩波書店　1925年
② 須田敦夫　日本劇場史の研究　相模書房　1957年
③ 松崎茂　日本農村舞台の研究刊　行論文刊行会　1967年
④ 竹内方太郎　野の舞台　ドメス出版　1981年
⑤ 角田一郎編　農村舞台の総合的研究　桜楓社 1971年

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

① 浦部　智義、渡邉　洋一、川島　慶之、東北地方に現存する芝居小屋の実態と地域における役割に関する研究、日本建築学会計画系論文集、査読有、第82巻、第739号（掲載確定）、2017年9月

② 浦部　智義、渡邉　洋一、福島県内に現存する地歌舞伎の運営に関する研究、日本建築学会技術報告集、査読有、第22巻、第51号、2016年6月、pp.711－716

〔学会発表〕（計３件）

① 我妻　佑磨、川島　慶之、渡邉　洋一、浦部　智義、康楽館における公演時の調査研究－東北地方に現存し歴史を持つ劇場空間の実態と役割についての研究　その5－、日本建築学会大会学術講演、2016年8月26日、福岡大学七隈キャンパス（福岡県福岡市城南区）

② 浦部　智義、木材・木造建築に係る連続講座『地域の施設と木造建築』、木を活かす建築推進協議会、2015年9月26日、国立那須甲子青少年自然の家（福島県西白河郡西郷村）

③ 川島　慶之、渡邉　洋一、浦部　智義、東北6県における芝居小屋の調査・研究－東北地方に現存し歴史を持つ劇場空間の実態と役割についての研究　その4－、日本建築学会大会学術講演、2015年9月5日、東海大学湘南キャンパス（神奈川県平塚市）

〔図書〕（計２件）

① 浦部　智義他、中山間地における集会施設とまちづくり活動［地形舞台-中山間過疎地域に寄り添う茅葺き集会施設と舞台を起点とするまちづくり活動-］、公益財団法人日本デザイン振興会、GOOD DESIGN AWARD 2015　年鑑、2016年3月、pp.635

② 浦部　智義　とうほう地域総合研究所、福島の進路、私の研究『地域施設の計画と実践～地方創生と福島復興～』、2015年5月、No393、p.50-53、

６．研究組織

(1)研究代表者

浦部　智義（URABE,　Tomoyoshi）
日本大学・工学部・准教授
研究者番号：１０４０９０３９

(2)研究分担者

坂口　大洋（SAKAGUCHI,　Taiyo）
仙台高等専門学校・建築デザイン学科・教授
研究者番号：７０２８２１１８